

タイムスリップ～お母さんのCD～

敦賀市立敦賀南小学校

六年

飯田 萌萌々夏
上山 結生
小久保 真泉
豆成 有香



各務原市立各務小学校

六年

野村 彩乃
早川 瑞姫
作花 朋音
小倉 颯

五年

小倉 颯

私、川中凜花があのも思議な体験をしたのは、今から二ヶ月前、放送委員会の委員長になりたての頃だった……。

その日は、オープンスクールだった。六年生としても放送委員長としても活躍していた私を、お母さんに見てもらいたかった。

「ちよつと、あなたも発言してください」

と言ってみたり、おこつてみたりした。

すると、お母さんが私の席に勢いよく歩いて来て、

「なにを言っているの。なんでもおこればいいってもんじゃないのよ」

と言つて、逆にお母さんがおこり出した。先生がすぐに止めに入ったので、私は、少しほつとした。でも活躍できていなかったのかと思うと、悲しくなってしまった。

家に帰ったら、お説教が始まった。

「お母さん、がっかりよ。おこつてばかりで！」

すかさず、私も言い訳をした。

「あの方が、六年生らしくかっこいいと思って……」

すると、お母さんは、さらにシヨックを受けたようだった。

「かっこいいかどうかで委員長をしているくらいなら、いい委員会はできません。早くやめてしまいなさい」

お母さんは、私が持っていたCDを手にとって、ゆかに投げつけたので、C
Dが真っ二つにわれてしまった。私は、青ざめた。

「お母さん、どうしてくれるの」

「こんなCD、あなたが持っていてどうするの」

と、お母さんはさげんだ。その後、周りのものを倒す勢いで部屋の扉を閉めて
いった。

「ボタン」

びっくりするような音がむなしく響く。

「……………」

さつきとはうってかわって物静かになった部屋。お母さんの勢いにあつとうされて、目が丸くなつたまま動けなくなつた私。

（何を考えてたんだろう……。私、委員長失格だ！）

そのまま、私はお母さんと一言も話すことはなく、「罪悪感」と言う名の重石をかかえたまま時間が過ぎていった。

—翌朝—

「行ってきます……………」

かつてないほどのテンションの低さで登校した私。いつもなら大笑いできる友達の話でさえも耳に入らなかつた。なぜなら……。今日が私の放送日だから……………。

教室に着いたら、素早くランドセルを片づけ、放送室に向かった。

（いい放送できるはずないよなあ）

そうと分かっているけど、やらなければいけない。私は、重いため息をついた。放送室に着いた私は、放送に使えそうなCDをさがした。きのう、見事にわれちゃったから……。

「……ん？」

どう見ても、かなり昔のCDが目についた。

「一九八五年、放送用曲集……」

これは、使えるのではないかと思い、ためしにかけてみることにした。やわらかいメロディが流れる。

「あれ、この曲って、お母さんの好きな……」

そうだ。お母さんがよく聞いている……。

その瞬間。

「あっ」

急に頭が痛くなった。そして、光の中に吸い込まれていった……。

「ん？ ここは……放送室だ」

でも、どことなくちがう気がする。

ガラッ。

だれか、入ってきた。

「ちよつと、ここは放送委員以外、立ち入り禁止よ。あつ、しかも放送用のCDまで勝手に持ち出して！」

（えっ？ えっ？ 私が、今日、放送するんですよ。しかも、そのCDは二十五年も前のCDですよ）という暇もなく、彼女は私の名札を見て、

「川中凜花さんね。あとで担任の先生に叱ってもらうからね」

そう言うと、ポイツと私を追い出した。

「放送委員にあんな人いなかったよね。しかもあのCDを放送に使う人もいない」

何が起きているのか分からないが、辺りを見回した。そして、変なことに気

がついた。

「あのカレンダー、一九八五年になっている。私が、前見たときは二〇一〇年だったのに……」

現状を整理してみた。

（知らない放送委員が、一九八五年のCDを使っている。カレンダーが一九八五年になっている）

そして、一つの可能性が頭をよぎった。

（私、タイムスリップした？）

そして、不思議なことがもう一つ。

あの子の容姿がお母さんに似ているし、ちらっと見たけど、名前が北山だった。そして、お母さんの昔の名前も北山……。

（あの人は、昔のお母さん？）★

私は目をこすった。また光に吸い込まれた。目が覚めたら保健室のベッドに

いた。保健の先生が、

「大じようぶ。お母さん呼んだからすぐにむかえが来るからね」

私は何がなんだかわからなかった。

すると昔のお母さんが、

「説教を受けてもらうからね」

と言って先生の所につれていった。先生がおどろいて言った。

「名札の色が五、六年生じゃない。あなたどこの学校から来たの」

「私は未来から来ました。だから北山さんを知っています。私のお母さんです」

私も言ってしまうから青ざめた。

(しまったどうしよう)

「未来から来たってどういうこと？　ちゃんと説明してよね」

「それは……」

私は言葉につまった。このまま話してしまっているのだろうか。昔のお母さ

んや先生は信じてくれるのだろうか。すると先生が、

「今日はとりあえずここにいてください」

と言って部屋から出ていった。私はあっちへ行ったり、こっちへ行ったりして部屋中うろうろした。何か話せるように考えた。それでも何も思いつかない。時計を見てみるともう十一時だった。さっきの先生が入って来た。

「校長先生がくわしく話を聞きたいと言っているのです、ついて来てください」と言われて校長室に入っていた。私は校長先生に言うことを全部話した。

校長先生は、

「あなたは未来の放送委員長で、今日があなたの放送日で、放送室にいたら急に頭が痛くなって今の放送室にいたということだね」

「はい」

私は答えた。するとまた頭が痛くなったので保健室へ行った。保健室に着くと急に目まいがしてたおれた。

目が覚めると家のベッドにいた。お母さんが、

「放送のCD、先生にたのんでもらったからね。こんどこそきちんと委員長としての仕事をやりなさいよ」

「今日の放送はどうしたのかな」

私は言った。

「もう一人の担当の子が、先生に相談して今日は一人でやったそうよ」

私は少しほっとした。もしかしたらお母さんがあんなにおこったのは放送委員をやっていたからなのかもしれない。私は急に委員長としての仕事や委員会としての仕事をもつとがんばらないといけないと思った。

「じゃあ、お母さん下にいるから、気分が良くなったら下りてきなさいよ」

「うん。わかった」

ドアが閉まると部屋の中が、しん……と静かになった。

私は、ねがえりをうつつと校長先生のことを思い出した。

(校長先生どうして、私のことを信じてくれたんだろ？ 気になるなあ)

すると、急に頭が痛くなりベットから転げ落ちた。

「い……痛い！ 痛いよお」

私は、頭をかかえたまま、気を失った。

気が付くと、保健室のベットでねていた。

「あれ？」

私が目を覚ますと保健の先生が、「あら、気が付いた？ もう、人さわがせな

子ね」と苦笑いをした。

「先生。私どうしてここに……」

「あなた、急にたおれるんだもの、びっくり」

(うそ？ どうして？ 今まで家にいたのに……)

「大じょうぶ？ なにかあったの？」

と、保健の先生が心配した。私は、

「いえ、大じょうぶです」

と、答えた。私は思った。

（どうしてだろ？　なんで過去に飛んだりするのだろう……なにか深いわけでもあるのかな？　だとしたら……）

「もう教室へもどりなさい」

と保健の先生が言った。私は「はい」と答えた。でもどうしてもあのCDを思い出してしまふ。私は、もう一回放送室に行つて、CDを手に持った。

そしたら、

「あなた何をしているの、そのCD返して」

と、お母さんがおこった。私は聞いた。

「このCDは？」

お母さんは、

「大切なものよ。私が委員長になりたてのころ、おこつてばかりいたの……。

オープンスクールで私のお母さんに見てもらった後、家に帰ってからしかられたんだ。なんでもおこればいいってもんじゃないのよって。私は思ったの。しっかり委員長やらなきやって。だから、もし私に子どもが生まれたら放送委員長でしっかりやってほしいなと思ったんだ。このCDには思い出がいっぱいまっているの」

と、お母さんが話した。私は、

（だからだ！ やつと意味がわかった。このタイムスリップは、委員長としての責任をとってほしかったからだ）

その時また頭が痛くなった……。

「う……痛い」

私はいつの間にか自分の部屋にいた。

その日以来、私がタイムスリップすることはなかった。

この不思議な体験は、私にとっても大切なことを気づかせてくれた。今は放送

委員長としてみんなをまとめて、おこつたりせず、いっしょうけんめいやつて
いる。